女性の輪 ネットワーキング

今、女性たちは互いに手を結び、ネットワークを広げようとしていますを重ね合わせることによって、女そして、それぞれのパワーかができるという自信を深め、そだって、あるいは女だからこそ何ていくのです。れが世の中の流れを少しずつ変えげることによって、一人一人の女ネットワークをさらに大きく広み出すことができるのではないで性では発揮し得ない大きな力を生しょうか。

〔特別寄稿〕

生活文化の創造と女性のネットワーク

静岡大学助教授　小桜義明

「生活文化大国」への道と女性の役割

日本は、「経済大国」になりました。しかし、その割には、私達の生活は豊かになりません。その原因のひとつは、これまでの日本の経済を動かしてきた男たちが、「モノづくり・カネもうけ」が上手であっても、モノの使い方・カネの使い方が下手だからです。

生活を犠牲にして、ひたすら働くこと・稼ぐことだけに専念してきた「仕事人間」の男たちは、折角、おカネをもうけても、それを豊かな生活のために使うより、もっと多くのカネを稼ぐために、さらにさらに働き、それが世界の国々との経済摩擦を生み出しています。

また、現代は「モノ余り」の時代であり、「つくれば売れる」という時代は、過去のものになりました。必要なモノ・人々が本当に求めているものを、つくらねばなりません。ところが、「仕事人間」の男たちには、何を人々が求めているのか、何が売れるのか、わかりません。

ここに「女性の出番」が、やってきました。生活に習熟し、カネの使い方が上手な女性こそが、この局面を打開しなければなりません。「生活文化の豊かさ」が産業経済の発展をリードする時代・「経済大国」が「生活文化大国」になるためには、女性が積極的に社会に進出し、男性の頭を・男性的な発想を転換させねばなりません。

「モノづくり」先進県である静岡には、特に、その転換が必要・緊急なものになっています。そのためには、静岡女性が互いに手を結び、その輪を広げていかねばなりません。

「ネットワーク」とは、なにか?

「ネットワーク」という言葉が、流行しています。この言葉は、本来、電気通信の分野で「通信網」として使われていたものです。それが、一九七〇年代のアメリカで、さらに一九八〇年代から日本で、人間や組織（集団）・地域相互の「繋がり」を示す言葉として使われるようになりました。

その理由は、ひとつにはコンピューターと電気通信が融合することによって、世界各地の大量の情報が瞬時にして結合され処理されるようになり、人間と人間との「繋がり」がより広域的に・より緊密になってきたからです。

もうひとつとして、この新しい人間と人間の「繋がり」から、新しい独創的な情報や組織・社会関係が造り出され、それが社会の発展と安定に大きく寄与することになると期待されているからです。

したがって、静岡女性の「輪の広がり」＝「ネットワーキング」とは、単に身近な人間が「繋がる」ことではありません。第一に、静岡の女性たちが、電話やテレビ・パソコン通信などのニューメディアを積極的に活用して、これまで遠くにいて縁のなかった人達と直接に「繋がる」・関係を「結ぶ」ことが必要です。

そして第二に、そのネットワークで結ばれた静岡女性のひとりひとりが、積極的に情報を発信し、異質・多様な情報を入手・理解するとともに、第三に、その中から何か新しいものを生み出すことが必要です。つまり、ここから日本や静岡県が必要としている生活文化の豊かさ・その情報が生まれ、それを産業経済の発展・人間生活の豊かさに結実せねばならないのです。

プロフィール

昭和20年生まれ。広島県出身。京都大学大学院経済学研究科卒。昭和49年静岡大学人文学部講師、同52年同学部助教授。専門の「日本の産業政策分析」以外にも、人の集まる街づくり市民会議顧問、自治体問題研究所の常任理事等、活動は多岐にわたる。

「普通女の居直り解放」を!

「そんなに難しいことが、私達にできるのかしら?」こんな不安を感じられる女性に捧げたいのが、「普通女の居直り解放」の発想です。

これまで女性は、その自立と解放のために、まず職業を持ち、経済的に自立すること、男に負けないだけの仕事をこなすことを目標に頑張ってきました。そのために生活の何処かを、幾分犠牲にせざるをえませんでした。しかし、現在の「経済大国」「カネ・モノ余り」日本で、男と同じように働きそのために何かを犠牲にすることが、どれだけ意味のあることでしょうか。

現在、求められていることは、女が「男並に」働くことではなく、男が「女並に」働き・家事や育児をこなすことであり、バランスのとれた生活の豊かさを享受することです。ここから「逆転の発想」が生まれます。それが「普通女の居直り解放」です。

普通の女が、普通の生活の中から、普通の情報を発信し、普通の人々が普通の力を普段に発揮する、普通の関係を結び、普通の人々に喜ばれる、普通の商品・サービスを開発し、普通の人の普通の生活を、普通に高めていく。これが、現代が求めている新技術であり、新製品であり、新しい質の活力を生み出す新社会・新組織ではないでしょうか。

静岡の普通の女性の皆さん、普通の人の偉大な力を信じ、自信を持ってネットワークづくりに励んでください。

女性のライフステージとネットワーク

情報化社会といわれる今日、女性が自分らしく生きるためには、多くの情報の中から自分が求める情報を適切に選択することが重要なカギとなります。

それでは、女性たちはどのようなことに関心を持ち、どこに情報交換の場を有しているのでしょうか。アンケートを行い、それらを調べてみました。

そこから見えてきたものは、仲間づくりの必要性を感じ、様々なネットワークづくりに励んでいる女性たちの姿でした。そしてそれは、一生の中で自分の置かれた位置（ライフステージ）によって特徴づけることができます。

夢から現実へ（20代）

仕事か結婚か、またはその両立か……最初でかつ重要なこの選択の前後で、関心や思考が大きく変わるのが二十代の特徴といえるでしょう。

特に選択前の女性たちにとっての関心事は、美容、ファッション、旅行、レジャー、仕事……と対象が自分に向けられていることが多く、その欲求が満たされない部分に対しての悩み（例えば金銭面、人間関係など）が中心になります。

結婚を契機に、関心の対象が自分中心から夫（恋人）も加わり、子供など未来の生活設計が、おぼろげながら浮かぶようになります。その結果、仕事を続けるか否か、嫁姑の問題など、夫、或いは夫との生活に関係した様々な部分での悩みや不安が生じるようになります。

育児、子育てへの関心は、年齢に関係無く、妊娠を機に大きく高まります。独身女性や子供を持たない女性にとって、子育てはあまり興味の対象とはなりませんが、子供を持った女性は、生活の大半が子供に費やされる分、関心が集中します。反面、自分の時間が持てないという悩みも出てきます。

そこで、この解決に取り組んでいるグループを紹介します。

共同子育てで母親の解放を〈あんふぁんて浜松〉

「あんふぁんて」とは創造すること。子供を預け合うことによって自分の時間を生み出そうというのがこのグループの目的である。入った動機は人それぞれだが、み

ザ・女の一生

20歳

んな〝あんふぁんてしよう〟の精神を持っている。

最初は二人で始めたこの活動も口コミ、あるいは新聞などで存在を知った人からの問い合わせ等々輪が広がり、現在では会員二十九名、子供は約六十名になった。

主な活動は、共同保育、個人的な相互託児、月一回の例会で、例会の内容は春のお花見から始まって、家族を巻き込んでのバーベキュー大会、スポーツ大会、クリスマス会や、後に紹介するソナティエイトと共同での映画会、コンサートと幅広い。

相互託児のメリットは、よその子も叱れるようになること、近くに身内がいないとき良いアドバイスが得られることにある。

現在、有志十二、三人で「浜松市の公園マップ」づくりに励んでいる。ベビーカーの通れる道、水道、トイレの位置、日陰の有無など母親の目から見た公園の姿を紹介したいとのこと。

一人では力不足で成り立たないことでも仲間を集めれば何とか動き出す。そんな姿勢でゆるやかに活動中。

バーベキュー大会で

連絡先　浜松市住吉四―七―一二
住吉グリーンハイツ四〇一
電話　〇五三四(72)九八九四
会員係　平田淳子

子育て真最中（30代）

子育て真最中、という女性が大半を占める三十代の関心事は、夫や自分の仕事と子供の年代により大別されます。転勤が多い、休みがとれないなどの仕事に関する悩み、また子供の教育についての不安などが中心となります。

子供が大きくなるにつれ、同年代の子供を持つ母親との交流が深まり、これまで学生時代や職場における人間関係が中心であったものが、地域に根ざしたネットワークに移行していきます。また、この地域のネットワークは、幼稚園小学校のPTA……と、子供の成長と共に関係が一層深まり、範囲も広がっていきます。

また、「家族」というレベルで物事を考え判断するようになるのも大きな特徴といえます。夫や子供の健康、子供の教育に起因した地域の環境の問題も重要な関心事となります。「家族全員が楽しく健やかに暮らすことのできる街で、快適なマイホームを持ちたい…」主婦ならではの夢といえるでしょう。

ほっとひと息

子育てが一段落したところで、再び関心が自分自身にも向けられるようになります。時間的にも余裕ができ、一度仕事から離れた人が再就職を考えるようになるのもこの時期です。仕事を続けている人にも精神的なゆとりが生まれ、「何か始めよう」と思う人が多いようです。

そのため、それまでの受動的なつながりの中から同じ目的を持った者同志の積極的な仲間づくりが始まります。

ひろがるネットワーク（40代）

さて、自分の仕事・生き方への自問自答をしながらも、次に浮上してくる最大の関心事は子供の教育問題です。変動する社会におけ

30歳

る教育のあり方、偏差値の問題、そして受験、親子共に悩む時期です。それに教育費の増加が追いうちをかけます。

また、サラリーマンの家庭などでは夫の転勤が大きな問題となります。マイホームや子供の教育などの理由により、やむなく単身赴任という形になることもありますが、どちらにしても家族に影響を与えることになります。

この頃になると家族の健康への関心も高まり、自らの老後と合わせて、親の介護の問題も現実のこととなってきます。高齢化社会を展望して、それぞれの生活設計に目が向いてくるのもこの時期です。

こうした時期に、女性の「仲間づくりは?」といえば、むしろ活発化してくるようです。地域のネットワークだけでなく、趣味のグループやボランティア活動のグループなど、ネットワークの範囲もますます広がっていきます。共通の活動の場や趣味を通じて、まわりの狭い人間関係だけでなく広く交流の場を求め、互いに啓発し合いたいという願望が見られます。不安や悩みの多い時期ではありますが、相談する仲間も解決する手段も共に有しているようです。

夫の転勤によってネットワークを失った夫人同士が親睦を深めているグループをここに紹介します。

転勤夫人の親睦会
〈くろわっさん〉

夫の仕事の都合とはいえ、行く先々で荷物を解いたりまとめたり——こういう生活が続けば、人生はまさに旅路の様なものであると感じられるかもしれない。その旅路の途中、たまたま静岡という地に降りたった女性たちが集ってできたのが、転勤族妻の集い〝くろわっさん〟である。

二年前、静岡市東部公民館主催の〝新市民ふれあい教室〟に参加したメンバーが講座終了後一つのグループとして独立し、現在は三十代四十代の主婦十八名から成っている。お料理、手芸、講演会、美術館見学などの活動もすべてメンバーが持ち寄った情報がもとになっている。好奇心の強さ、情報量の多さは確かに転勤族妻たちの特徴であるかもしれない。

「それに、どうしても前に居た所と現在居る所を何かにつけ比較してしまうんですよね。」

これもまた様々な所を歩いてきた者の習いといえようか。

「ここではドアに鍵をかけていない人や、セールスマンにもすぐドアを開けてしまう人が多いわね。」

「デパートのバーゲン会場に殺気だった雰囲気がない。あれも静岡の特徴ね。」

彼女たちのユニークな静岡論評はとどまるところをしらず、なかなか鋭いものだが、総合評価をすれば、静岡は住みやすい落ち着いた町というのが結論のようだ。

「私たちのグループには特別な規約も、○○しなければならないという制約もありません。代表も全員の持ち回りですし、個人の内情にも皆深入りしない様です。ちょうど子供の自由な遊び仲間みたいなものですね。あまりいばれた存在ではないかもしれませんが、ここでは私たちは○○さんの奥さんとしてではなく、自分自身そのものとしてふるまえる。そんなところが良いのかもしれません。」

御近所の縁でも血縁でもない、自由な個々の顔を大切に結び付い

県立美術館の前で

夫の転勤が決まったけど、子供の学校のことを考えると移りたくはないし。それにしてもマイホームはいつのことになるのやら……

40歳

いまの子は勉強、勉強で何だかかわいそう。でも、これも試練と思ってがんばってね。

50歳

ている、このしなやかな視点に立ったネットワークは新しい主婦の台頭を思わせる。

連絡先　静岡市東部公民館
代表者　倉辺順子

そろそろ関心事 老後と健康（50代）

高齢化社会ということがさらに現実味を帯びるこの時期。老後の暮らしは大丈夫か、年金で暮らしていけるか、そして夫の定年と、経済的な面での不安を抱く人が増えます。

健康面でも少しずつ心配のタネが……。環境汚染や輸入食品の安全性などに関心が向くようになります。健康で経済的にも安定した老後の生活へ向けて、女性たちは行動をおこしていきます。

この時期は、これまでにつくられたネットワークをさらに継続・発展させ、一人でいくつものグループに属している場合が多いようです。

子供が独立したあとは、自分の生き甲斐を求めて、趣味や社会参加へと積極的な姿勢がみられます。健康に不安がないわけではないが、仲間同士相談し合い、情報交換しながら互いに励まし合うこともできます。

豊かな老後をめざして（60代）

夫も定年を迎え、豊かな老後のスタート地点ともいえます。一方で、病気に対する不安も大きくなる時期ですが、人生をより良く生きたい、精神的に豊かで価値ある人生を送りたいという気持ちが強まってきます。

心の交流を求めて仲間づくりにも熱心で、地域活動への参加が増えてきます。一つの活動が次々と仲間を増やしていく例として、袋井の斉藤さん、藤城さん、小高さんにお話を伺ったので紹介します。

公民館で三歳児を持つお母さんの勉強会が開かれるときに託児ボランティアをしている三人は、この活動を通じてボランティア仲間に知り合いもでき、子供のお母さんとも仲良くなれてよかったと語った。公民館活動はきっかけがないと参加しにくいものだが、ここで知り合った仲間に誘われて、それぞれ別の仲間とバウンドテニスや大正琴で楽しんでいるという。

転勤でよそから来たという小高さんは、「この活動のおかげで、お付き合いも増え、街角で話をしたり挨拶を交わすことも多くなりました。」と、とりわけメリットが大きかったようだ。

藤城さんは、子供の家庭学級がきっかけで二十二年間活動している仲間がいるが、その中の数人で図書整理のボランティアもしている。「そこでまた別の人と知り合うこともできます。」と、ますます意欲的である。

三人ともすでに御主人が定年退職して自宅にいるが、家を訪ねてきてくれる友達が少なく、盆栽や魚釣りぐらいしかすることがない定年後の男性に同情している。

「主人と二人きりで家の中にいるとノイローゼになりそうです。出るところを探しておいて良かったわ。」の言葉に笑いながらうなずく三人。ネットワークの重要性を感じた。

左から斉藤さん、藤城さん、小高さん

60歳